

令和 3 年 5 月 28 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02617

研究課題名（和文）未来派演劇における劇作法と舞台空間の研究

研究課題名（英文）A Study of Playwriting and Stage Space in Futurist Theater

研究代表者

菊池 正和（KIKUCHI, Masakazu）

大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・准教授

研究者番号：30411002

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000 円

研究成果の概要（和文）：複数の場面の同時性や浸透といった構造的特徴を持つ総合演劇や観客の五感に訴える触覚演劇を提唱したマリネッティ、色彩の演劇を提唱して劇の基調となる精神やパトスの視覚化・外在化の役割を照明効果に託したリッチャルディなど、未来派演劇の劇作法を綿密に検証して、それが後のイタリア演劇の演出法に与えた決定的な影響を明らかにした。

同時代のイタリア演劇を代表する戯曲『作者を探す六人の登場人物』のドイツにおける2つの上演を比較することで、当時ヨーロッパ演劇の最先端であったドイツの演出法と萌芽期であったイタリアの演出法との差異を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近現代ヨーロッパ演劇史においてイタリア演劇は、スター俳優の身体性に依拠した19世紀末から20世紀初頭にかけての隆盛が紹介されたのち、一足飛びにピランデッロの「劇中劇三部作」におけるメタシアター的な劇作法や演出行為が誕生したと錯覚を起こさせるような限定的な取り上げ方しかされてこなかった。本研究では、20世紀前半の未来派演劇を再評価し、その舞台改革を主に劇作法と舞台装飾の観点から再検討することで、イタリア近現代演劇における演出の成立過程において、未来派演劇が決定的な貢献を果たしたことを明らかにした。それにより、ヨーロッパの演劇動向に、より正確な形でイタリア演劇を位置づけることができた。

研究成果の概要（英文）：I revealed the decisive influence of Futurist dramaturgy on the later staging methods of Italian theater. Marinetti advocated "synthetic theater" with structural features such as the simultaneity and penetration of multiple scenes, and "tactile theater" that appeals to the audience's five senses. And Ricciardi advocated "theater of color" and entrusted the role of visualizing and externalizing the spirit and pathos to lighting effects. And by comparing two German productions of "Six Characters in Search of an author", one of the most famous plays of the Italian theater of the same period, I also clarified the differences between the German staging method, which was at the forefront of European theater at the time, and the Italian method, which was in its infancy.

研究分野：近現代イタリア演劇

キーワード：未来派演劇 フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ ルイジ・ピランデッロ

1. 研究開始当初の背景

(1) ヨーロッパ近現代演劇の演出史におけるイタリア演劇の不在

ヨーロッパ演劇史において、舞台における劇の上演の諸要素を統括する、近代的な意味での演出家が誕生したのは19世紀後半のことである。それは、当時の自然主義に基づいた劇作法の成熟が、俳優の新しい演技術と視覚的な舞台造形との調整を要求したことから生まれた職能であった。その後20世紀に入ると、自然主義偏重の劇作法や戯曲の複製としての演出に対する反発から、象徴主義的な演出の可能性や前衛的な演劇実験が模索されるようになる中で、演出家は作品の独自の解釈者、舞台における創造者へとその役割を変えていくことになる。

しかしながら、研究開始当初この時代(19世紀後半から20世紀前半)のイタリア演劇における演出家やその演出法を研究対象に加えて分析し、ヨーロッパの演劇動向に正当に位置づけた研究はほとんど見当たらなかった。先行研究の趨勢は、エレオノーラ・ドゥーゼなどのスター俳優の身体性に依拠した演劇から、一足飛びにピランデッロの「劇中劇三部作」においてメタシアター的な劇作法や演出行為が誕生したかのような錯覚を起こさせるほど大雑把な捉え方であった。また、舞台装置や照明効果などを含めた演出実践の研究に至っては、その対象は20世紀半ば以降のストレーレルやロンコーニに限定されていたのが当時の状況であった。

(2) 未来派演劇の研究における総合的な視点の不足

マリネッティが「未来派創立宣言」を発表してからちょうど100年を迎えた2009年をピークにその前後で、とりわけヨーロッパにおいて未来派の再評価の機運が高まった。そこでは、従来の研究の中心であった、マリネッティら第一世代が諸ジャンルにおいて発表したマニフェストとそこから派生した芸術作品の再考に加え、第二世代の思想・作風の変化や諸地域の未来派運動の相違にまで射程が広がり、未来派は時代的・地域的な複数性を示すものとして捉えられた。演劇においても事情は同様であり、1960年代以降未来派演劇の研究をリードしてきた Mario Verdone の論考を変わらぬ基準点としながらも、Giovanni Antonucci (Storia del teatro futurista, 2005) や Enrica Mezzetta (Il teatro futurista in teoria, 2006)、Lia Lapini (Futurteatro, 2009) などが劇作法や舞台装飾の面で研究の射程を広げていた。ただし、これらの研究が対象として取り上げている劇作法の理論や舞台装飾の特徴は限定的かつ個別的であり、総合的な上演実践の視点やその演出行為との結びつきは、まだ十分に検証されていなかったため、本研究は主にこうした側面からアプローチを行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、未来派演劇の舞台改革を主に劇作法と舞台装飾の観点から再検討することで、イタリア近現代演劇における演出の成立過程に、未来派演劇を決定的な要素として位置づけることであった。マリネッティが提唱した総合演劇や触覚演劇、リッチャルディが唱えた色彩の演劇などの劇作法を分析するとともに、未来派の舞台美術家が構築した舞台装置や照明、衣装などの実際の上演における効果を検証することで、未来派演劇がいかなる演出の可能性をイタリア演劇に開くことになったのかを解明した。とりわけ、本研究の主たる目的となったのは以下の3点である。

(1) 劇作家や演劇の理論家が行った上演実践の改革の手法や目的を明らかにする。

(2) 舞台美術家の側からの上演改革の手法や目的を明らかにする。

(3) 未来派演劇の劇作法と舞台美術に既に内包されていた演出の萌芽を、当時の上演実践の中に確認する。

3. 研究の方法

(1) 1910年代、20年代にマリネッティが提唱した総合演劇や映像演劇、触覚演劇などについて、宣言文の綿密な分析から、その理論の目的と同時代における意義を明らかにした上で、シンテジと呼ばれる劇的断片において用いられた、複数の場面の同時提示や浸透、「物体のドラマ」等の劇作法を取り上げ、それらが舞台上の演出行為や空間構成にどのような変化をもたらしたのかを明らかにした。また、色彩や光の利用が、舞台上における戯曲の複製にいかに作用したのか。リッチャルディの色彩演劇を取り上げ、検証することで明らかにした。

(2) プランポリーニやデペーロの舞台美術や衣装を取り上げ、その造形性や抽象性が意図するところについての考察を行った。

(3) 1920年代後半に劇作家ルイジ・ピランデッロが率いていた「ローマ芸術座」の『作者を探す六人の登場人物』ドイツ公演の実践を取り上げ、当時のヨーロッパ演劇において最先端の演出を行っていたラインハルト演出による同作品の上演実践と比較することで、イタリア演劇における演出の到達点を確認するとともに、未来派演劇の劇作法との影響関係を検証した。

上記の研究を遂行する上で、当時の劇評や雑誌などの一次資料を用いた文献学的アプローチ

を主に用いた。

4. 研究成果

(1) 1920年代の第二未来派における劇作法の研究

フィリップ・トンマーゾ・マリネッティがその革新的な劇作法において成功を収めた「総合演劇」という演劇形式から離れて、「連鎖的シンテジ」というある程度の長さや広がりを持つ戯曲に回帰した1920年代後半から30年代初頭にかけての戯曲を中心に分析することで、第二未来派の劇作法における秩序への回帰とその後の更なる再転向について研究を進めた。第二未来派の主たる劇作法の1つであった「連鎖的シンテジ」とは、1910年代の総合演劇を構成していたシンテジと呼ばれる劇的断片を複数連鎖させて戯曲を構成することで、個々のシンテジが持つ革新的な推進力や劇作法は維持しながら、物語性の中に自らの主張を表現することであった。しかし、この物語性と革新的な劇作法との共存を目指した試みは、その両者のバランスの不均衡から早々にその限界を露呈してしまい、第二未来派は未来派としての自意識とともに、自己風刺と社会批判を横溢させた同時性の劇作法に再転向し、再び戯曲は躍動を取り戻すことになった。また、ファシズムの台頭から独裁化という当時のコンテキストの中で第二未来派の劇作法を再検討した結果、未来派の矜持とファシスト政権への潜在的な批判が読み取れた。本研究の成果に関しては、以下の学術論文のなかで発表した。

(論文)「マリネッティの『連鎖的シンテジ』 - 秩序への回帰が意味するもの - 」
(『言語文化研究』第45号(大阪大学大学院言語文化研究科)2019年3月31日)

(2) 1920年代のイタリア演劇における演出実践の研究

ピランデッロの代表作『作者を探す六人の登場人物』のドイツ公演を取り上げて、ドイツにおける初期のピランデッロ受容について考察した。とりわけ、1924年のラインハルトの演出による公演と、翌年のピランデッロ自身が演出を務めたローマ芸術座による公演を当時の劇評などから再構築し、それらの公演に対する批評家たちの言説を分析した。そして、劇作家の立場からの演出家や俳優に対する不信感を、舞台上で2つのエクリチュール、すなわち「登場人物」に仮託された戯曲テキストの精神と演出家や俳優による舞台上での創造行為を対峙させるという構造のうちに表明したピランデッロの意図を、ラインハルトの演出がいかに適切に上演したかを論証した。また、ピランデッロの演出における未来派演劇の影響を指摘した。本研究の成果に関しては、以下の学術論文のなかで発表した。

(論文)「ドイツにおけるピランデッロの受容 - ラインハルトによる『作者を探す六人の登場人物』の演出を中心に」
(『言語社会共同研究プロジェクト 2019 ヨーロッパ超域研究1』(大阪大学大学院言語文化研究科)2020年3月30日)

(3) 未来派演劇における造形性と抽象的・機械的身体に関する予備研究

バッラやデペーロ、プランボリーニらの舞台美術や舞台装置、照明、衣装を検証し、その特異な造形性の観点から、未来派演劇における上演実践の改革や演出の可能性を研究していく中で、未来派演劇の舞台空間論の中核に抽象化・機械化された身体性が存するという確信を得た。令和二年度から採択されている新たな研究課題「未来派演劇における身体性の研究 - その抽象化と機械化の意味」の予備研究を進めることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 菊池正和	4. 巻 1
2. 論文標題 ドイツにおけるピランデッロ受容 - ラインハルトによる『作者を探す六人の登場人物』の演出を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヨーロッパ超域研究 1	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菊池 正和	4. 巻 45
2. 論文標題 マリネッティの「連鎖的シンテジ」－秩序への回帰が意味するもの－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 59-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------